

幼児における性役割の概念と選択

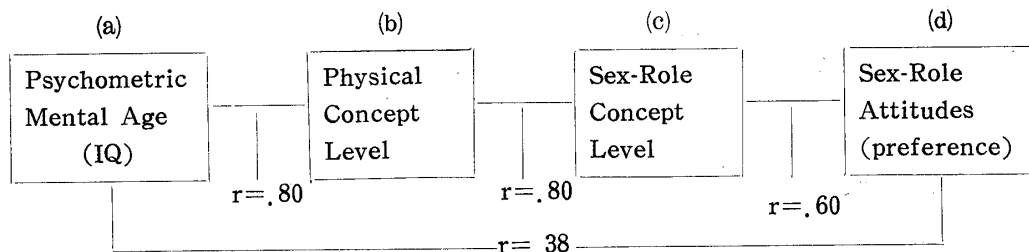
湯川 隆子

Sex-Role Concept and Preference in Children

Takako YUKAWA

一般に、性役割の学習は、幼児が性役割の概念 (sex-role concept) を獲得し、性役割選択 (sex-role preference) の傾向を形成することとされている。Kohlberg (Kohlberg 1966a, b, 1971; Kohlberg & Zigler, 1967) は、認知-発達論の立場から、性役割の獲得における知能の重要性を指摘し、知的発達と性役割の発達との平行性を主張している。彼によれば、性役割の概念 (性的同一化-「自分は男の子 (女の子) である」という自己概念) は、一般的な概念の獲得 (物理的な概念) に平行して学習される。つまり、性役割の学習は、幼児が自己概念に基づいて社会的な行動を分類し、自己概念に一致したものを自己のものとしてとり入れていく (性役割の選択)、一種の概念形成の過程として捉えられる。したがって、性役割の発達は、幼児の生活年齢や身体的発達よりも知的発達に依存すると考えられる。彼は実際の研究から、以下の3点を主張している。

(1) 知的発達と性役割の発達との平行性は、具体的には図のような下位過程間の関係 (相関関係) で捉えられる。



(2) 知的発達と性役割の発達との関連において、知能の役割が特に重要性をもつのは年少 (3~4歳) においてである。

(3) 性役割の学習は、^(注1) 女兒より男児のほうに知能の影響が大きい。

Kohlberg 自身は、具体的には(a)と(d)の関係、つまりIQ (精神年齢) と性役割選択の関係を、追跡研究によって検討しており (Kohlberg & Zigler, 1967)、知的発達と性役割発達の平行性についての大まかな検証はなされているが、そこで用いられた性役割選択の測度 (尺度) の間に、上述の(2)に関して若干の差が生じている。すなわち、いわゆる It 尺度ではIQとの間に3、4歳では相関が認められるが、6歳では認められていない、一方、Fauls & Smithの尺度では6歳以上でも相関がみられている。このような差は、ひとつには性役割選択の測定方法の違いからくるものとも考えられるが、IQを指標とすること自体にも問題があるのでは

(注1) Kohlberg は、(2)については、6歳にもなれば、もう性役割の概念はある程度、具体的な事物に関してはでき上がる、(3)については、母親の役割に比して父親の役割のほうが抽象的で理解しにくいために、より知的なものが必要とされる、としている。

ないか。(1)の図式にもあるように、性役割選択の指標としては、Sex-Role Concept Level すなわち性役割の概念ができていないか、のほうがより直接的なものといえるのではないか。

しかし、Kohlberg 自身は、実際には今までに、IQ と性役割選択の関係、あるいは、物理的な概念レベルと性役割概念レベルの関係しか吟味していない。Kohlberg の他に、知的要因と性役割の獲得との関係を扱った諸研究でも、そのほとんどが知的発達の指標としてIQ もしくは精神年齢を用いている (Clark, 1963; Epstein & Liverant, 1963; Havighust, 1953; Lefkowitz, 1962)。そして、そこでも上述の(2)の年齢に関して結果に違いがみられ、IQ と性役割選択の対応性が必ずしも一致して明確にされているとはいえない。

IQ は確かに知的発達のひとつの有力な測度ではあろうが、性役割の学習との関係においては、IQ は指標としては大まかすぎるように思われる。少なくとも、性役割の概念化のレベルと性役割選択の関係をまず確かめるべきではないか。小橋川 (1966) の指摘にもあるように、性役割の概念と性役割選択は必ずしも一致するものではない。より厳密にいうならば、性役割概念 (性的同一化) の形成レベルのみでなく、形成された自己概念に従って、性的に類型化された事物を「男のもの」、「女のもの」に分類できるか、といったレベルにまでつっこんで捉えた性役割の概念と選択の関係を押えておく必要があると考える。そうすることによってより確実に知的発達と性役割の発達の平行性を検証できるのではないか。

今までに、性役割の概念化と選択の関係を扱ったものに井上 (1959)、間宮 (1959) のものがある。両者とも性別化された事物の性的帰属 (分類) と選択との関連性を示したものであるが、いずれにおいても、IQ と分類と選択の3つを関連させる視点が欠けているために十分とはいえない。IQ と性役割の概念を選択に対して直接に比較検討することが望まれる。

本論は Kohlberg の理論に従って、大きくは知的発達と性役割の発達との平行性を検討するなかで、性役割の選択に対して、指標としてはIQ より性役割の概念化のほうがより直接的に関係しているという仮説を検証することが目的である。それに加えて、上述の Kohlberg の示唆(2)年齢の問題、および(3)性差の問題、の2点についてもあわせて検討する。

実 験 I

<目的> 探索的実験として、まず Kohlberg ら (1967) の実験を一部追試して性役割の発達と知的発達の平行性を検討する。具体的には、IQ の高低と性役割選択の度合いとの関係を見る。

<方法>

被験者 Ss: 名古屋市内の私立幼稚園児48名。年齢は年長; 6:7~5:9, 年中; 5:7~4:9。知能検査 (田研式幼児用集団検査) の結果より年長児55名, 年中児69名のうち、IQ の高い者から順にIQ 109 までを知能優秀児群、IQ 100を中心^(注2)に105~89までを知能普通児群とした (各群24名で内訳は年長, 年中, 男女とも各群半数ずつ)。詳細を Table 1 に示す。IQ に関して優秀児群と普通児群に有意な群差 ($P < .01$) があつた他は、性差、年齢差 (年長対年中) いずれも有意ではなかつた (中央値検定)。

材料; 性役割選択テスト (付表参照)。

用いたテストはほぼ Kohlberg ら (1967) に準じ、Brown (1956)、小橋川 (1959) らのもの

(注2) 当初は下位群の人数を10名程度予定していたが、IQ のレベルとの関係からそれぞれ6名になつた。年少児については信頼すべきIQ が得られなかつたため本研究では参考資料に止めた。

(Table 1) Ss 一覧表 優秀児群, 普通児群のIQ得点範囲と中央値

	男				女			
	優秀児群		普通児群		優秀児群		普通児群	
	年長	年中	年長	年中	年長	年中	年長	年中
得点範囲	132 } 109	119 } 109	105 } 89	102 } 93	167 } 114	149 } 113	102 } 93	102 } 92
	132~109		105~89		167~113		102~92	
中央値	122.0	117.5	96.5	98.5	140.0	131.5	96.0	98.5
	117.5		98.0		133.5		97.0	

(N:各群とも6名ずつ)

を参考にして本研究に合うように若干改良した。

1) 性役割選択テストA—①玩具図版16枚, ②品物・道具図版8対, ③友人図版4枚の3部から成る。この他に「中性的な赤ちゃん」の図版1枚。2) 性役割選択テストB—こどもの遊び・活動場面からなる8対の図版。(1)(2)の図版の大きさはB5で, 画用紙に色, 登場人物の性・人数に配慮して描いたものである。図版は全部, (イ)大学生8名による性別化判定により全員が一致した図版, (ロ)本被験児と同年齢の別の幼稚園児30名に同様の性別化判定と図版の熟知性を問い, 約90%が一致し, 知っているとした図版, を採用した。

手続き; 個別検査。施行順序および各テストの教示は次の通りである。

1) 選択テストA—これは Brown の It 尺度の技法に準じたもので性別の曖昧な「中性的な赤ちゃん」に投影させる方法。まず実験者は、「赤ちゃん」の絵を被験児(S)に示し、『この赤ちゃんはどれが好きでしょう。赤ちゃんだったらこれがほしいだろうと思うものをあなたがえらんであげてね』と教示し, 図版を①, ②, ③の順に呈示する。①玩具図版—16枚をランダムに一括呈示してその中から順に8枚を, ②品物・道具図版—8対の図版を1対ずつ呈示してどちらか一方(計8枚)を, ③友人図版—図版4枚を一括呈示してその中から1枚を, それぞれ選択させる。

2) 選択テストB—これは Kohlberg らに従って Fauls & Smith の尺度を利用したもので, Sに直接的に好きなものを選択させる方法。実験者による『あなたならどれが好きかな。あなたの好きなものをえらんでね』の教示後, Sに8対の図版を1対ずつ呈示してどちらか一方を選択させる(計8枚)。

以上1), 2)の順に施行したが, テストに際してはテストA, Bとも図版の初回の呈示時にSに図版の熟知性を問い, 知らない場合には実験者が性別化に影響しないように説明してから選択させた。またSが選択したがない場合には強制せずに次に進んだ。

測度; どのテストにおいても各SについてSの性に適合した図版を選択している場合に1点を与え, その合計を算出し, 性役割選択得点とした。なお, 友人図版については選択に対して男の子(女の子)の選択には2点, Girlish Boy (Boysh Girl)には1点を与えた。これら得点の高いほど自己の性にマッチした選択を行っていることを示す。可能な得点範囲は, テストA; 玩具および品物・道具図版—0~8点, 友人図版—0~2点, テストB; 0~8点。

実験期日・場所; 昭和49年6~7月。於名女大付属幼稚園の一室。

<結果と考察>

選択テストA B別に、知能優秀児群と普通児群における性役割選択得点とこれらに関する検定結果(中央値検定)を Table 2 に示す。(注3) これよりテストAについては次のことが示された。1) 年中の女兒の結果は部分的に Kohlberg の理論を支持している(年長, 年中合わせて (Table 2) 実験 I; 優秀児群, 普通児群における性役割選択得点 (中央値))

		男				女			
		優秀児群		普通児群		優秀児群		普通児群	
		年長	年中	年長	年中	年長	年中	年長	年中
テストA	玩具	4.0	4.5	5.5	5.0	4.5	6.0	6.5	3.0
		4.0		5.5		5.5		5.0	
	品物	3.0	2.5	5.0	3.5	5.0	7.5	6.5	6.0
		3.0		4.0		7.0		6.0	
友人	2.0	0	1.5	1.5	2.0	2.0	2.0	2.0	
	0.5		1.5		2.0		2.0		
合計	7.0	7.5	12.5	10.0	11.0	15.5	14.5	11.5	
	7.0		11.0		15.0		13.0		
テストB	遊び	7.0	6.5	6.5	6.0	6.0	5.0	6.0	6.0
		7.0		6.0		6.0		6.0	

<検定結果>

- ★IQと選択の関係;
 - 優秀児群>普通児群
 - { 年長・中コミ女-友人 (P<.01)
 - { 年中女
 - 玩具 (P<.05)
 - 合計()
 - 普通児群>優秀児群
 - 年長男女コミ-玩具 (P<.05)
 - 年中男
 - 友人 ()
- ★性差; 全ての場合で女>男
 - 年長+年中, 優秀児群
 - 玩具以外全てに P<.05
 - 年長+年中, 普通児群
 - 友人 P<.01
 - 年長+年中, 優秀児群+普通児群-玩具以外全てに P<.01
 - 年中, 優秀児群+普通児群
 - 玩具以外全てに P<.01
 - 年中, 優秀児群全てに P<.05
- なお, テストBについてはいずれにも n. s.
- ★年齢差;
 - 優秀児群男-友人
 - 年長>年中 P<.05
 - 優秀児群女-玩具
 - 年中>年長 P<.05

の有意差は年中女兒の差が反映されたものと推察できる)。つまり、知能の高いこどものほうがより適切な性役割選択を行っている。2) 年中の男児については、逆に知能普通児群により高い選択が示され、Kohlberg に合致しない。3) 性差については、有意差のみられたいずれの場合も女兒のほうがより性度化されているという結果である。特に年中の優秀児群ではテストA全てで(玩具, 品物, 友人図版およびこの3つを合わせた合計)有意差が認められている。4) 年長と年中の間の年齢差については、優秀児群の男児では友人図版で年長>年中, 女兒では玩具図版で年中>年長, となっており、有意差のみられた優秀児群で逆の結果になっている。1) 2) 3) 4) より、年中の女兒の知能優秀児群における高選択が顕著であり、このことが性差, 年齢差にも反映しているとみられる。年中女兒優秀児群の品物図版における選択得点が7.5と他の群に比して高くほぼ満点(8点)に近くなっており、この結果がおそらく全てに影響しているのであろう。

次に、テストBについてはテストAに準じた全ての検定で有意差が認められなかった。

以上のことからのみIQが性役割選択の指標として適切か否かを即断できないが、本結果に関しては、Kohlberg の理論を支持するのはテストAの女兒においてのみである。さらに、Kohlberg の主張—知能の性役割選択に及ぼす影響は特に年少においてであり、かつ女兒より

(注3) 整理にあたって、Ss の図版の熟知性のチェックをしたところ、知らないと答えた Ss は非常に少なく、また知らなくて選択を拒否した S は 1 名、反対の性の図版を選択した S は 1 名にすぎなかった。

も男児においてである一については、6歳以上では知能による差は認められないという点ではこれを支持しているが、男児よりも女児のほうに知能の差がみられ、男児では逆の結果さえ出ている(テストA)。

なお、テストAの「赤ちゃん」の性別に関して、(イ)「赤ちゃん」の絵をみせられた男児(女児)の被験児の『これはおとうと(いもうと)だ』といった発言が数回みられたこと、(ロ)選択傾向に、テストAでは一貫して男の子(女の子)のものを選択している女児(男児)が、テストB(直接自己の好きなものを問われるテスト)では一貫して女児(男児)を選択するという対称的なケースが若干みられたこと、などより、性的に曖昧な「赤ちゃん」が被験児の性をほんとうに反映しているのか疑問に思われた。また、本結果でもテストA・B間の測定方法の違いが明瞭に示され、測定上の諸問題を考慮する必要が認められた。

実 験 Ⅱ

<目的> 実験Ⅰの結果をもとに、性役割選択に対して指標としては、IQより性役割の概念化ができていないか否かのほうがより直接に関係しているという仮説を検討し、そこからKohlbergの理論について考察する。

<方法>

被験者 Ss; 実験Ⅰと同じ Ss.

材料; 性役割選択テスト. 実験Ⅰで使用したもの(付表参照).

手続き; 個別検査. 施行順序および教示は以下のようである.

(1) 性役割選択テスト

1) 選択テストA・間接法—これは実験Ⅰの投影法によるテストであり、ここでは間接法とよぶ。施行の要領は実験Ⅰの場合と全く同じであるが、このテストの終了時に「赤ちゃん」の性別とその判断理由を問うことがつけ加えられた。2) 選択テストA・直接法—実験Ⅱで新たに加えられたテスト。「赤ちゃん」の図版を用いずに実験者が『あなたならどれが好きかしら。好きなのをえらんでね』と教示してSに直接に選ばせるもの。図版の呈示順序・選択の要領は1)の間接法と同じ。3) 選択テストB—実験Ⅰと全く同じ。以上1) 2) 3)の順に施行した。^(注4) Ssの図版の熟知性また選択の強制についても実験Ⅰと同じ配慮を行った。

(2) 性役割分類テスト—性役割選択テストの直後に行う。選択テストA、B用の図版について、実験者が『今までいろいろえらんでもらったおもちゃやあそびの中に男の子のものと女の子のものがあってしょう。今度は今えらんだものを「男の子のもの」と「女の子のもの」に分けて下さい。数は同じずつでなくてもいいし、わからないものがあっても分けてもよろしい』と教示した後、選択テストA用図版を①玩具図版、②品物・道具図版、③友人図版の順に、その後選択テストB用図版を呈示して、Sに分類させた。図版はいずれの場合もランダムにくってSにわたして分類させた。

測度; (1)性役割選択テスト—いずれのテストも実験Ⅰと全く同じ。ただし、テストA間接法では「赤ちゃん」の性別と選択の対応により得点化した。すなわち被験児が女児であっても「赤ちゃん」を「男の子」として男性具を選択していれば得点を与えた。

(注4) この施行順序は、予備テストにより決められた。予備テストでは間接法→直接法、直接法→間接法の2方法を行ったが、後者の場合に、先の直接法の影響が顕著に現われてしまったので、前者の方法に統一した。

(2)性役割の概念化—分類テストにおいて各S毎に性的に類型化されている図版を自己概念(性役割の同一化)に従って分類できているか否かを見、分類できている者とできない者に分ける。

以上の測度について、(I)IQと性役割選択得点との関係、(II)性役割の概念化の正否と選択との対応関係、を分析、検討する。

実験期日・場所；昭和49年11月，実験Iに同じ。

<結果と考察>

(I) IQと性役割選択の関係

選択テストA，B別に知能優秀児群，普通児群毎に性役割選択得点およびその検定結果(中央値検定)をまとめたものがTable 3である。これより以下のことが示された。1) テスト

(Table 3) 実験II；優秀児群，普通児群における性役割選択得点(中央値)

		男				女			
		優秀児群		普通児群		優秀児群		普通児群	
		年長	年中	年長	年中	年長	年中	年長	年中
テストA・間接法	玩具	5.0	3.5	6.0	3.0	5.5	4.0	5.5	4.5
		4.5		3.5		4.5		5.0	
	品物	7.0	5.0	5.0	6.0	7.0	7.0	7.5	5.5
		6.0		6.0		7.0		6.5	
	友人	2.0	1.0	2.0	0	1.0	1.0	2.0	2.0
	2.0		1.0		1.0		2.0		
合計	13.5	10.5	11.5	8.5	13.5	12.0	15.5	11.0	
	12.5		10.5		13.0		14.0		
テストA・直接法	玩具	6.5	6.0	7.0	4.5	7.0	5.5	7.0	7.0
		6.0		6.5		6.5		7.0	
	品物	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	7.5	8.0	7.5
		8.0		8.0		8.0		8.0	
	友人	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
	2.0		2.0		2.0		2.0		
合計	16.5	15.5	16.5	13.5	17.0	15.0	16.0	16.0	
	16.0		16.0		16.5		16.0		
テストB	遊び	8.0	7.0	8.0	7.0	7.5	5.5	7.0	6.0
		7.5		7.5		6.0		6.0	

<検定結果>

★IQと選択の関係；全てにn.s.
 年長，年中コミ，別) いずれの男女コミ，別
 場合でも全ての図版(テストA，Bとも)についてn.s.

★性差；いずれも男>女

- ・テストA直接法
 普通児群—品物 P<.05
- ・テストB
 優秀児群 P<.05

★年齢差；いずれも年長>年中

- ・テストA間接法
 優秀児群，普通児群とも
 合計 P<.05
- ・テスト直接法
 優秀児群—玩具 P<.05

A，Bともに，知能優秀児群と普通児群の間に選択得点に関する有意な群差はひとつも認められない。テストA直接法では，品物，友人図版においてほぼ全群が満点かそれに近い得点を示

している。テストBの男児についてもそれに近い傾向が窺われる。2) 性差についての有意差はテストA, Bとも男児のほうが女児よりも性度化されているという結果である。3) 年長と年中の年齢差はいずれの場合も年長のほうが年中より適切な選択を示している。4) 測定方法の違いについては、性差、年齢差ともに間接法よりも直接法(テストBもこの部類に入る)でより差が認められる。

以上の結果より、IQが性役割選択の指標として適切とはいえない。選択得点が満点に近くなった図版が幾つかあり、そのために差がみられなくなったのであろう。実験Ⅰに対して実験Ⅱでは、男児のほうがより性度化されていること、年中女児のみが目立った特徴を示してはいないこと、が注目される。

(Ⅱ) 性役割の概念化と選択の関係

年長、年中児を合わせ、IQに関係なく性別化された図版を性に対応して正しく分類できるか否かを、選択との関係から次の4つにカテゴライズする。A) 図版が全て正分類され、しかも分類と選択が対応する者、B) 図版の分類に誤分類を含み、選択も誤選択を含むが、分類と選択は対応している者、C) 図版は全て正分類されているが分類と選択が対応しない者、D) 図版の分類に誤分類を含み、分類と選択が対応しない者、また分類不能の者。全Ssを上記の4つのカテゴリーに従って分けた結果をTable 4に示す。これに関する検定結果(直接確率)は次のようであった。1) テストA直接法では男女児ともに品物、友人図版で有意差がみられた。

	正分類	誤分類
対応	A	B
対応せず	C	D

(Table 4) 実験Ⅱ；性役割の概念化(分類)と選択の対応関係

(人数)

分類 と 一致	男						女								
	間 接 法			直 接 法			間 接 法			直 接 法					
	+	-		+	-		+	-		+	-				
	A	C	B	D		A	C	B	D		A	C	B	D	
テスト A	0	8	0	16		2	6	1	15		0	11	0	13	
品	5	7	2	10		12	0	2	10	**	6	10	0	8	
友	8	2	2	12	**	9	1	1	13	**	11	4	2	7	
テスト B				7	3	2	12	*				4	7	1	12

(* P<.05, ** P<.01)

2) テストA間接法では男女児ともに友人図版にのみ有意差がみられた。3) テストBでは男児にのみ有意差が認められた。これらは1) 2) 3) とともに、正しく分類できる者はそうでない者よりも分類に適合した選択をするという結果である。

これらのことより、次の4点が指摘できる。1) 少なくとも7個所において有意差が認められ、IQよりも分類テストによって測られた性役割の概念化のほうが性役割選択に対する指標としてはより直接的に関係していると考えられる。2) 有意差の認められた図版は、友人図版が最も多く、玩具図版ではひとつも認められていない。したがって、概念化と選択の対応関係は友人図版に最もよく認められる。3) 性差については、男児における有意差がひとつ多く、僅かにではあるが概念化と選択の平行性は男児により認められる。4) 測定方法の違いについては、間接法(いわゆる投影法)よりも直接法でより顕著な差がみられる。

次に、上述のA B C Dの4カテゴリーのうちのAに該当する Ss の人数を群別に表示したものが Table 5 である。これより、次のことがいえる。1) 優秀児群と普通児群での人数の差は余りないが、女兒においては優秀児群の人数の多い図版が幾つかみられる。2) 全般的に優秀児群、普通児群に関係なく年長のほうが年中よりも人数が僅かに多いのみで、男児の品物・道具図版では間接法、直接法ともに年中児のほうが人数が多い。このような結果は、I Qの高い者あるいは年齢の高い者が必ずしも概念化ができるとは限らないことを示していよう。

(Table 5) カテゴリー-Aに該当する人数

		男				女			
		優秀児群		普通児群		優秀児群		普通児群	
		年長	年中	年長	年中	年長	年中	年長	年中
テスト A 間	玩	0	0	0	0	0	0	0	0
	品	1	2	1	1	3	0	3	0
	友	3	1	3	1	3	3	3	2
テスト A 直	玩	0	1	1	0	1	0	0	0
	品	2	4	4	2	6	1	4	2
	友	3	2	3	1	5	3	4	2
テスト B		2	2	2	1	3	0	1	0

(人数)

年齢ではなく知的発達レベルが選択にとって重要であるという点は支持されているが、特に年少にとり重要という点は支持されていない。②については、テストBにおいて男児にのみ有意差が認められていることより、男児にとりこの指標がより有効であることを窺わせる。測定法については、間接法、直接法ともに一致した傾向を示しており、Kohlberg らにおける尺度間の違いは本結果では余りみられなかった。

今までになされた研究との関係を見ると、井上(1959)は、4種の性別化された玩具の分類課題で、3歳では約70%、4歳半ばになると約90%が分類に正答し、6歳にもなればこの分類に失敗する者はほとんどおらず、また、直接法による選択テストの結果、3~7歳では知能(IQ)と選択の相関はないと報告している。井上はIQと選択の関係を分類課題との関連で検討していないため、本結果と直接に比較できないが、IQと選択が必ずしも一義的に対応しないという点では本結果と一致している。ただし、6歳になれば分類に失敗することはないとの報告に対しては、井上の場合は4種の玩具についてのみの分類であり、本実験の課題のほうが少し難しいと判断でき、したがって本結果で年長児(6歳)においても概念化に失敗するSsがいたと考えられる。また、性差については、井上では性役割の概念の発達に男女差はないとしている。

間宮(1959)は、It尺度に類似した図版を直接法で施行し、選択させた後に図版の性的帰属を求めるという方法で行った結果、男女児ともに5歳になると性差意識がある程度明らかに形成されていること、玩具図版にこの性的役割分化が顕著で、活動(遊び)では分化度が低いこと、男児のほうに性的役割意識が強いこと、の3点を指摘している。これらを本結果と比べ

ると、年齢に関しては違いがあるが、性役割の概念化（分類）と選択が密接に関係するという点、また男児のほうにより強い性度化を認める点で両結果は一致している。間宮の場合にはIQが考慮されていないという不十分さはあるが、本結果をかなり支持するものといえるのではないか。

次に参考資料として、実験Ⅰ、Ⅱにおいてデータ収集可能であった年少児の Ss 男児5名、^(注5) 女児8名についてみる。IQと性役割選択の関係、分類と選択の関係を、先の年長、年中の結果と対照させてみたところ、IQと選択の関係の分析では、テストA間接法で男女児ともに年中の普通児群に、テストA直接法で男児は年中の優秀児群に、女児は年中の普通児群に、それぞれ近い傾向を示している。テストBでは男児は年中（優秀児群と普通児群は同じ得点）、女児は年中普通児群に近い傾向を示した。要するに、年少児の結果は男女児ともに年中の普通児群に近い傾向をもつといえる。なお、IQの得点範囲、中央値は、男児は年中の優秀児群、女児は優秀児群と普通児群の間になっている。これらのことを考えあわせると、年少においてデータ収集可能であった Ss は、教示を理解しえたという点で知的には比較的高いレベルにあると推察でき、IQの高さと選択得点の両方ともが、男児では年中の優秀児群に、女児では年中の普通児群に、それぞれかなりあてはまっている。次に、分類と選択の対応関係については、テストA間接法、直接法、テストBを通して、男児は年中の普通児群に、女児は年中の優秀児群に、それぞれ匹敵させることができる。

以上のことより、年少児の結果はほぼ年中児のそれに近い傾向を示しているといえる。優秀児群と普通児群の関係が男女児で入れかわっていることが注目されるが、少なくとも性役割の選択に対しては、年齢的、身体的な発達よりも知的な発達レベルのほうがより関係するという Kohlberg の立場は支持されるのではないか。ただし、知的発達の指標としてのIQと概念化の適切さについての比較はここでは触れえていない。

以上実験Ⅰ、Ⅱを通して、知的発達と性役割の発達との平行性、さらに、知的発達のレベルを示す指標としては、IQよりも性役割の概念化ができていないか否かのほうがより直接的に性役割の選択に関係していること、が明らかにされた。それに関連したこととして結果より提出された2、3の点について若干の考察を試みる。

(1) 実験ⅠとⅡの差について

IQと性役割選択との関係は実験ⅠよりⅡにおいて強く否定された。また、実験Ⅰで顕著な特徴を示した年中の女児優秀児群が、実験Ⅱでは他の年中児の傾向と類似してきた。さらに実験ⅠからⅡにかけて年長児は選択得点が余り変化しないのに対し、年中児は少し高くなり年長の得点に近くなってきている。これらは、実験ⅡがⅠから数カ月経っており、その間に年中児の性別化が進んだ可能性のあること、実験Ⅱがいわば再テストにあたり、選択テストについての学習がなされた可能性のあること、などが微妙に影響しているのかもしれない。

(2) 性役割選択テスト図版の弁別力について

実験ⅠではIQの違いは玩具、友人図版においてみられ弁別力が高かった。品物・道具および遊び図版ではほとんど分化がみられなかった。実験ⅡではIQの違いは玩具図版で僅かにみら

(注5) 年少児については、IQの測定が可能だったもの、教示が理解でき実験の遂行できた Ss についてのみ整理した。従って、年少児については優秀児群、普通児群の区別はない。年齢：4：1～3：5、IQ：124～104、（中央値、男児117、女児119）。

れ、友人、品物、遊び図版では完全に近い選択が示され弁別力は余りなかった。概念化の正否については、友人、品物、遊び図版に弁別力があり、玩具図版にはみられなかった。間宮(1959)では弁別力は玩具図版に高く、遊び図版に低かった。Brown(1956)では3種の図版の中で品物と友人図版に重みづけがされている。これは品物図版に最も弁別力があると仮定しているわけだが、本結果と対照させてみると、概念化と選択の関係の結果がこれに一致するのみである。図版の作成については今までにも性別化の基準として実際にどのような刺激図版を用いるかによって微妙にその影響が出ているようであり、今後詳細な検討を要する問題であろう。

(3) 測定方法の違い—間接法と直接法—について。

Kohlberg らの結果でも、また本結果でも選択テストの測定法の違いによる差がみられた。いずれの場合にも直接法のほうが間接法よりも明確な結果が示されている。これに関連して、投影法で果たして被験児の性が反映されるかを調べたところ(実験Ⅰの結果と考察の項参照)、(イ)被験児の性と「赤ちゃん」の性は必ずしも一致しないこと、(ロ)「赤ちゃん」がどちらかの性に偏ってみられやすいという傾向もみられないことが明らかになった。従来、間接法(投影法)については、①「It」の中性化が困難であること(どちらかにみられやすいという偏りを克服できにくいこと)、②投影の仕方として必ずしも被験者の性が反映されるとは限らないこと(きょうだい、身近かな者を投影することもある)、③幼児にとって「Itに選ぶ」ということの意味・教示の理解の困難さがある、などが指摘されている(小橋川、1969)。一方、直接法に対しては、幼児が同一化している性役割よりも社会的に規定された基準に同調する危険、つまり「構え」が反映される危険があるとされている。本結果では②と③の欠点が現われているように思われる。②については実験Ⅰ、Ⅱを通じて、やはり『これはいもうと(おとうと)だ』といった身近かな者を投影させる Ss が何人かいた。③については、特に年少児で教示が理解できず実験が遂行できなかったケースがかなりあった。また『これは赤ちゃん用のものだから』と言って、うば車、明るい色のものを選択する Ss が幾人かいた。中村(1967)、南(1973)らの結果でも有意差は認められていないが、同性の図版を選択する割合は直接法のほうにより高いことが報告されている。これらのことからみて、「構え」が反映する危険を防いだために結果に曖昧さを残すよりも、教示が理解されない、あるいは誤解される危険による結果の歪みのほうがより重大なように思われる。

結 語

本稿は Kohlberg の認知—発達論—知的発達と性役割の発達は平行する—に沿ってこれを検討する中で、知的発達レベルの指標としては、IQよりも性役割の概念化ができていくか否かのほうが、性役割の選択に対して直接的に関係しているという仮説を検討した。その結果、性役割選択の適切さは年齢よりも知的要因(IQにしる性役割の概念化にしる)に影響されること、そして、選択の適切さの指標としては、IQよりも性役割の概念化の正否(性別化された事物を男のもの(女のもの)に分類できるか否か)のほうが有効であること、が明らかにされた。また、Kohlberg の主張—性役割の発達における知能の影響は、①5歳以下の年少において、②女兒よりも男児において、大きい—については、②が部分的に証左された。①については、不十分ではあるが5歳以上、6歳でも性役割の概念化の正否が選択の適切さに関係していた。

今回は年少児(3~4歳)についてのデータは不十分であったため参考資料に供したが、

Kohlberg の理論を深めるためには年少児についての資料が是非とも必要であろう。また、今回は I Q の測定条件に制限があり、データ数が非常に少なく、統計処理も十分に行えなかった。さらに大きい集団での検討が望まれる。最後に、本研究は知的発達と性役割の発達の対応関係を Kohlberg の図式のごく一部に限って吟味したものであった。Kohlberg も示唆しているように、本来的には、Physical Concept と Sex-Role Concept の対応関係を含めた研究デザインが立てられるべきであろう。

<付記> 本研究は昭和49年度児童研究所プロジェクト「親子関係」の一部としてなされたものである。研究に際し、多大なご協力を賜った名古屋女子大学付属幼稚園の諸先生方、および実験をお手伝いいただいた児童学専攻の学生諸氏に厚く感謝の意を表します。

文 献

1. Brown, D. G. 1956 Sex-role preference in young children. Psychological Monograph, 70, NO.14, 1-19.
2. Clark, E. 1963 Sex-role preference in mentally retarded children. American Journal of Mental Deficiency, 67, 606-610.
3. Epstein, R. & Liverant, S. 1963 Verbal conditioning and sex-role identification in children. Child Development, 34, 99-106.
4. Havighust, R. J. 1953 Human development and education. New York: Longmans Green & Co..
5. 井上和子 1959 幼児の性差意識の発達, 児童心理, 14, 756-762.
6. 小橋川 慧 1959 児童の性役割選択に関する発達の研究, 心理学研究, 30, 31-35.
7. 小橋川 慧 1966 幼児・児童の性役割行動に関する最近の研究, 教育心理学研究, 14, 24-37.
8. 小橋川 慧 1969 性差と性役割の獲得, 桂広介・園原太郎(編)「児童心理学講座8, 人格の発達」137-184.
9. Kohlberg, L. 1966a A cognitive-developmental analysis of children's sex-role concepts and attitudes. In E. Maccoby (Ed.) The development of sex-differences, 82-173, Stanford: Stanford University Press.
10. Kohlberg, L. 1966b Cognitive stages and preschool education. Human Development, 9, 5-17.
11. Kohlberg, L. 1971 Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.) Handbook of socialization theory and research, 347-480, Chicago: Rand McNally & Company.
12. Kohlberg, L. & Zigler, E. 1967 The impact of cognitive maturity upon the development of sex-role attitudes in the years four to eight. Genetic Psychological Monograph, 75, 89-165.
13. Lefkowitz, M.M. 1962 Some relationships between sex-role preference of children and other parent and child variables. Psychological Report, 10, 43-53.
14. 間宮 武 1959 性差研究の体系化と性差意識に関する研究, 教育心理学研究, 6, 205-216.
15. 中村多喜子 1967 幼児の性役割選択の測定に関する研究, 日本教育心理学会第9回大会論文集, 30-31.
16. 南 憲治 1973 幼稚園児における性役割—性役割の習得過程にみられる男女差を中心として—京都大学教育学部 学士論文.

<付表> 性役割選択テスト用材料

選 択 テ ス ト A 用 図 版			選 択 テ ス ト B 用 図 版	
① 玩具図版 16枚	② 品物・道具図版 8対	③ 友人図版 4枚	遊び・活動図版	8対
1 救急車 9あやとり	1 ひげそり — くちべに	1 Boy	1 大工遊び — 台所遊び	
2 ピストル 10ままごと	2 く つ — ハイヒール	2 Girlish Boy	2 野球遊び — 人形遊び	
3 野球道具 11人形	3 背 広 — ワンピース	3 Boysh Girl	3 自動車洗い — 部屋掃除	
4 飛行機 12きせかえ	4 ネクタイ — ネックレス	4 Girl	4 怪獣ごっこ — ままごと	
5 船 13うば車	5 帽子(男用)—帽子(女用)		5 ミニカー遊び—ぬいもの遊び	
6 怪 獣 14ピアノ	6 大工道具 — 料理道具		6 す も う — まりつき	
7 刀 15パラソル	7 時計(男用)—時計(女用)		7 こいのぼり — ひなまつり	
8 昆虫採集具16折り紙	8 ズボン — スカート		8 たこあげ — はねつき	

★玩具，品物，遊び図版では左側が男児用（男子用），右側が女児用（女子用）の図版，友人図版では，1，2が男児用（男子用），3，4が女児用（女子用）である。